

「運動会を創る」

－運動会アンケート、運動会の歴史、運動会実践から学ぶ－

(例会趣旨とアンケートによる研究部コメントを含む)

研究部長 楠橋佐利 (豊能町立吉川小)

1. はじめに

教育現場の現在(2020.10月)、学校カリキュラム改革や行事の精選・時短の問題、働き方改革など様々な問題が絡んで運動会の位置づけが変化しつつある。この時にこそ、教科外体育としての運動会の位置づけをどのように考えるか、同志会でも十分な話し合いが必要ではないかと思われる。近々の支部記念講演(神谷氏、吉澤氏)から、「運動会」を今後どのように創っていくのかを考える契機をいただいた。また、11月に予定されている支部大会(豊中大会)で、今、変わろうとしている運動会について会員・会員外を問わず共に考えるための「運動会分科会」を設け、そこにつなげたいとも考えた。

2. 年度をまたぐ支部研究部例会について

(1) コロナ禍による運動会の変容と

例会の延期

今回の「コロナ禍」で、学校では、運動会の中止をはじめ、大幅軽減などの状況にあり、上記のような傾向にますます拍車がかかっている。この「運動会を創る」例会も延期を余儀なくされ、年度をまたぐ例会となった。(同志会の年度は9月始まりのため)そこで、

①できるだけ多くの会員が例会に参加するために、事前に運動会アンケートを作成

→アンケートの結果報告と討議。

②運動会歴史(昨年度冬大会で提案された安武氏の資料から)から学ぶ。

③例会の中心となる実践報告の検討。支部大会では、吉澤氏(東京)の実践報告が確定。さらに岨賢二氏(兵庫)の今年度の運動会に向けての取り組みを報告も決定。そこで、今回は、岨賢二氏の実践経過報告を中心に論議することとした。

(2) 討議の柱になりえる内容

「運動会を組織する」や「自治」「子どもが主人公の運動会とは」等と関わって

① アンケート集約の資料を基に

② 実践報告を受けた上で

③ 上記2点を運動会の歴史を踏まえた上で論議

アンケートは、10月28日現在14名分集まった。その分析を行った結果についても資料を作成した。その中で研究部の見解も含めて、改めて例会の趣旨にかえて提示した。

(3) アンケート集約からの研究部コメント

①プラス要因(現状と今後期待される要因も含む…一部抜粋)

○「子どもたちにやらせてあげたい」と、子どもたちの学びを充実させたいとの思いから提案しようとした学校があることは、救われる思いがある。

○今年度に新たに生まれた運動会の価値観が、ぶつかり合う中で、運動会とはどうあるべきか?そもそも運動会とは何か?といった議論を行う土俵が、生まれているのではないか(もしくは生み出す)とも感じる。

○今回のこの「異例」の事態によって、この

ような議論が生まれ出したこと自体は何かの変化の機会になるのではと感じている。私の学校では、10月初旬に例年のような形と異なるが運動会を開催したところ、多くの教職員から様々な意見が出た。競技の在り方や子どもたちの行事に対する取り組み姿勢など、例年通りの運動会ではおそらく出なかったであろう意見が出たことはよかったと思う。

② マイナス要因(「現状」として語られたこと、または、将来を展望して…一部抜粋)

▼ 論議の中心は、「コロナ(感染症)対策」(「消毒をする」「密を避ける」等)や、「保護者」の参加の仕方、午前中開催、種目・演目の中身などが決められており、子ども不在。⇒「これも『コロナ』なので仕方ない」という非常事態であることが理由とされてしまっている。

▼ 子どもと教職員で、協同しながらどのように運動会をつくっていくのかといったところに主眼が置かれていない。

▼ 議論や話し合いを促そうとしても、時間的制約や周りの教職員との考えの相違や温度差から議論にまで行きつかないことも多くの学校現場で起こっていることに学校単位の問題ではないようにも思えてくる。

3. 研究部見解(本例会の趣旨にかえて)

(1) コロナ禍から見えた運動会の問題点

たしかに、コロナウイルスの蔓延によって、学校運営は、様々な場面で支障をきたした。学校行事も例外ではない。しかし、

① 運動会開催の時期や開催時間などの流れは、以前から一定できつつある背景(9月~10月ではなく5月~6月の運動会、午前中開催等)もあり、「運動会とは？」を問われている感覚はなく、同志会員もそこに言及していない事態がある。

② そのような状態の中で、「運動会の反省」が行われ、時間のことや段取りなどが中心

に総括されていることに対して批判的に言及する者がいない。

③ したがって、こういう緊急事態という状況下で、「そもそも」論は受け入れられず、いかに運動会の反省などが形骸化しているがわかる。

④ 教育委員会直轄の命令的な指示があるところが多かったが、ないならないで、「どうして上から指示がないのだ？」という声も聞こえてくる。カリキュラムは、「学校で計画決定する」ということ自体の形骸化、すなわち、教育課程づくりやそれに伴う学校運営そのものも形骸化しているし、そこへの異論も職場からは出てこない。

(2) 子どもが主人公の運動会とは？

今こそ時間がない中でも話し合いはとても必要だと思った。それは、目の前にいる子どもたちの願いを聞いてから、大人が動いていくことをしていかないと、子どもたちは「大人が勝手に決めた」や「どうせ先生が決めるんでしょ」といった、夢やわくわくの無い状態になってしまう可能性がある。先生たちの運動会の価値も持っておくのはとても大切だが、子どもたちがここまで望まない(望むようにしかけることが一番だが)となったら考えようだなと思った。(研究部 中村)

中村のコメントの下線部分にあるように、「子どもたちの願いを聞く」ということは、同志会の会員の中では、よく聞かれる言葉であるが、その「願い」がこちらの思っているものと違う時、子どもたちのどのような環境や状況の中で生まれてきたのか、についても検討する必要がある。これらのアンケートからの分析も含み、例会で提示される全ての報告内容から次年度に開かれるであろう運動会の在り方を、例会参加者一人一人が考えられるような例会になればと考える。